

研究論文

戦後の空手道復興に関する一考察：
雑誌『SPORT KARATE からて』の分析をとおして¹

佐藤 穂花 (スポーツ文化学部)²

八木 沢 誠 (スポーツ文化学部)³

Abstract

Karate, the Japanese word for 'empty hands', is a Japanese martial art whose physical aspects seek the development of defensive and counterattacking body movements. It has become famous as a sport, spanning different age groups from children to adults across the world nowadays. Recently, it was selected for the Tokyo Olympic games in 2020.

Today, there are mainly two types of Karate, that is, light contact type and full contact type. Furthermore, the light contact Karate consists of four main styles in Japan : Goju-ryu, Shito-ryu, Shotokan, and Wado-ryu. The full contact type was started after World War II.

Regarding the history of Karate, it is said to have originated in Okinawa and spread gradually throughout Japan around the end of the Taisho period. In that period, Kendo and Judo were also popular as Japanese martial arts. Followed by them, Karate also needed the stylistic classification and the four types of names were chosen.

Karate had developed through karate clubs in the universities, but the style did not matter then and was automatically decided by the leaders. Unfortunately, karate was recognized as one of the martial arts and was prohibited after World War II by the General Headquarters of the Supreme Commander for the Allied Powers (GHQ) , similar to Kendo and Judo.

This magazine was published only eleven times for two years, between December of 1946 to July of 1948, by the Kanbukan publishing division of the International Karate Federation Headquarters in Tokyo, which later came to belong to the full contact Karate type.

The character of this magazine frequently used the word 'Sport Karate'. This was supposed to have escaped the GHQ. Moreover, it reported the activities of the karate club in the universities. Its other purpose was the introduction of teaching the movement techniques by the karate leaders each time.

Our finding is that there exist two purposes for publishing it : one is the promoted revival of Karate based on the Karate clubs in the universities, that is, at the group level, and the second

¹ A Study of Karate Revival after World War II : Through an Analysis of the 'SPORT KARATE' Magazine

² Sato Honoka, Faculty of Sport Culture

³ Yagisawa Makoto, Faculty of Sport Culture

one is aimed at an increase in karate at the personal level through the readers. This led to the immediate revival of karate during the post-war confusion period.

It was in the later years when it met the adoption standards for an Olympic event that karate has begun to be considered as an Olympics event. However, the publisher of this magazine also dreamt or envisioned Olympics participation of Karate so that Karate can be considered as a sport of peace.

抄録

空手は「空の手」という日本の言葉で、身体的な側面から防御的かつ反撃的な体の動きを追求する日本の武術である。今日では子どもから大人まで、世界中でスポーツとして有名になり、2020年東京オリンピックの種目にまで選ばれるようになった。

今日ではおもに、伝統空手とフルコンタクトといった2つのタイプがある。そして、伝統空手は、剛柔流・糸東流・松涛館・流和道流の4大流派がある。フルコンタクト空手は、第2次世界大戦後に普及した。

空手の歴史は沖縄に始まり、大正末期に次第に全国に広がっていったと言われている。当時、剣道や柔道も武道として盛んに行われていた。それらに伴い、空手もスタイルの区別が求められ4つの名前の流派ができた。

空手は大学の空手部をとおして普及するが、流派は統一されることなく、指導者の流派で実施されていた。空手は武道の一つとして認識されていたため、第二次世界大戦後にGHQによって、剣道や柔道同様、制限を受けた。

本誌は、終戦直後の1946年12月から1947年7月にわたり11回だけ、国際空手道連盟総本部の韓武館出版部から発刊された。

本稿で明らかにされたことは以下のとおりである。すなわち、本誌の発刊は戦後の混乱期において、少しでも早急に大学の空手道部を基盤とした、集団としての空手道の復興を推し進めることを助長した。そして、そのいっぽうで、毎回、空手指導者が技術面での話題を紹介することによって、個人のレベルにおいても、空手道を普及・発展することに繋がっていたと結論づけることができる。

空手がオリンピック競技種目として検討され始めたのは、オリンピック競技としての採用基準を満たした近年のことである。しかし空手道を平和としてのスポーツとして位置づけ、オリンピックの種目に取り入れたいという願望は、終戦直後に発刊された本誌にすでに明瞭に表われていた。

Key words: Karate, Sport, SPORT KARATE, World War II

キーワード：空手道，スポーツ，SPORT KARATE，戦後

I. はじめに

今日、空手道の世界競技者数は、194の国と地域で1億3,000万人以上と言われている¹⁾。1999(平

成11)年、世界空手連盟が国際オリンピック委員会の公認団体に登録され、空手もアテネ五輪の候補種目に挙げられた²⁾、オリンピックの正式競技種目として採用されることはなかった。そして

2020年の東京オリンピックにおいて、開催国種目枠として初めて実施されることとなった³⁾。

「からて」は、沖縄で「手（ティー）」と呼ばれていたものがはじまりとされている。中国から伝わった拳法を「唐手（とうで）」と呼び、沖縄にもとからあったものを「手（ティー）」と呼び区別されていた。「唐手」がいつ中国から沖縄へと伝わり、どのような経路で「手」と合わさり発展したのかは、未だ明らかにされていない^{4, 5)}。

1908（明治41）年、京都の武徳殿で大日本武徳会が主催する第10回青年大演武会が開催され、その際に唐手型の特別演武が沖縄県出身の中学生により披露された⁶⁾。

日本国内でより広く知られるようになったのは、1922（大正11）年に文部省主催のもと東京で開催された第1回体育展覧会で、沖縄出身の船越義珍⁷⁾が公開演武を行ってからである。その後、摩文仁賢和、本部朝基、宮城長順らが国内での普及に努めた⁷⁾。さらに1927（昭和2）年には、屋部憲通がハワイで空手道を紹介したことが記録に残されている^{8, 9)}。

1935（昭和10）年頃になると、大学では早稲田、慶応、東大、東京商科、学習院、日本医大、中央大などに空手道部がおかれ、社会的にも広く認められるようになる。そして大日本武徳会の中で、柔道や剣道とならび日本独自の武術としての地位を築き上げていった¹⁰⁾。

戦後、武道は軍国主義を後押しした原因の一つとして捉えられ、1945（昭和20）年8月には、連合国最高司令官総司令部（General Headquarters of the Supreme Commander for the Allied Powers, 以下GHQとする）の通告にしたがって、学校での柔道・剣道などの武術稽古が全面禁止となった¹¹⁾。武術として認識されていた空手も例外ではなかった。それでも空き地や掘立小屋など、道場というイメージには程遠い粗末な場所で、空手の稽古は細々と続けられていた¹²⁾。そのような状況の中、1946（昭和21）年12月から1948（昭和23）年7月までの2年間、雑誌『SPORT KA-

RATE からて』¹²⁾が11回にわたり出版された。

そこで本稿では、終戦直後に出版された雑誌『SPORT KARATE からて』の内容を詳細に分析することによって、同誌が戦後の空手道復興に、どのように関わっていたのかを考察する¹³⁾。なお、本稿は空手流派の派生や空手の競技化における過程について追究する類のものではない。

II. 『SPORT KARATE からて』の概要

同誌は1946年12月から1948年7月までと、終戦直後2年にも至らない限定された期間ではあるが、空手道の復興の様相について継続的に書きつづられている。その中においてとくに着目すべき点は、当時は今日のように空手道の流派が細分化されていなかったことと、未熟ではあるものの、タイトルに見られるよう空手道をスポーツとして認識しようとする意識が芽生え始めていたという点である。また空手道の復興が、大学を中心として行われていたことを裏付ける記事が随所に見られる。このように、終戦直後の空手道の復興を知る上でも史料価値は高いと言える。

次に、同誌の全容について整理する。

全書誌情報は表1のとおりである¹⁴⁾。出版社は、国際空手道連盟総本部の韓武館出版部である¹⁵⁾。韓武館は1945（昭和20）年9月に東京・九段下に設立した空手道場で、わずか5年間ではあったが、韓国籍の尹曦炳を館長とすることで稽古や空手冊子の編集等の活動を可能とした¹³⁾。

1946（昭和21）年12月の「創刊号」から1948（昭和23）年7月の廃刊に至るまで、書誌名が、「SPORT KARATE からて」「SPORTS KARATE からて」「SPORTS 空手」「KARATEDO 空手道」「SPORTS KARATE 空手道」と5度改定されているが、継続雑誌として登録されていることから同一の雑誌と判断される。このタイトル部分の変更の経緯については触れられていないが、「SPORT」または「SPORTS」が意識して使用されていたことは明白である。

表1 雑誌『SPORT KARATE からて』の書誌情報

タイトル	SPORT KARATE からて 第1巻第2-3号	SPORTS KARATE からて 第1巻第4-5	SPORTS 空手 からて 第1巻第6-7-8	KARATEDO 空手道 からて 第1巻第9-10	KARATEDO 空手道 からて 第2巻第11-12	SPORTS KARATE からて 第2巻第13-14号	SPORTS KARATE からて 第2巻第5-6	SPORTS KARATE からて 第2巻第7号
タイトル	からて	からて	からて	からて	からて	空手道	空手道	空手道
著者	韓武館出版部 [編]	韓武館出版部 [編]	韓武館出版部 [編]	韓武館出版部 [編]	韓武館出版部 [編]	韓武館出版部 [編]	韓武館出版部 [編]	韓武館出版部 [編]
出版地 (国名コード)	JP	JP	JP	JP	JP	JP	JP	JP
出版地	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京
出版社	韓武館出版部	韓武館出版部	韓武館出版部	韓武館出版部	韓武館出版部	韓武館出版部	韓武館出版部	韓武館出版部
出版年月日等	1947.4	1947.6	1947.7	1947.1	1947.12	1948.3	1948.5	1948.7
大きさ、容量等	48 p : 19 c m	24 p : 26 c m	20 p : 26 c m	24 p : 26 c m	20 p : 26 c m	20 p : 26 c m	20 p : 26 c m	20 p : 26 c m
注記	バンフレットバイインダー	バンフレットバイインダー	バンフレットバイインダー	バンフレットバイインダー	バンフレットバイインダー	バンフレットバイインダー	バンフレットバイインダー	バンフレットバイインダー
価格	十円	二十円	二十円	二十円	二十円	二十五円	二十五円	三十円
部分タイトル	発行にあたりて 表紙尹師範金城師範の組 手	グラビア活躍する師範の スナッフ	我等の信条	我等の信条	我等の信条	我等の信条	我等の信条	我等の信条
部分タイトル	唐手道の将来	如花公相君と八加二師八 法 (上) 遠山師範誌 画	我等の信条	巻頭言「若き空手家へ」	空手道秘儀十八の研究	空手道秘儀十八の研究	空手道秘儀十八の研究	空手道秘儀十八の研究
部分タイトル	糸洲先生の印象記	から手の修業精神考	理想的基礎練習方法	空手の防具と韓武館試 合規定案	空手道秘儀十八の研究 (4) 実践的基礎練習方法	空手道秘儀十八の研究 (4) 実践的基礎練習方法	空手道秘儀十八の研究	空手の練習と試合の心得
部分タイトル	空手の流派	空手の渡来について	發臂の種類と当て方	理想的基礎練習方法	空手道秘儀十八の研究	空手道秘儀十八の研究	読者の頁	読者の頁
部分タイトル	名人達人秘話	理想的基礎練習方法	護身術組手の研究	護身術組手の研究	世界スポーツ通信	世界スポーツ通信	世界スポーツ通信	世界スポーツ通信
	自由組手に関する一考察	如花公相君と八加二師法	世界スポーツ美談	護身術組手の研究	理想的基礎練習方法	理想的基礎練習方法	野嶋主人	野嶋主人
	空手攻防法研究部	護身術組手の研究	読者の頁	空手道の過去と将来	試合組手と手常法	試合組手と手常法	野嶋主人	野嶋主人
	護身術的組手の研究	小説講義	地方だより	地方だより	特集若人は起つ (各校空 手部巡り) . . . 明大、 早大の巻 . . .	特集若人は起つ (各校空 手部巡り) . . . 明大、 早大の巻 . . .	世界スポーツ通信	世界スポーツ通信
	足の立ち方と蹴り方	詩石川通夫	消息	理想の基礎練習方法	第二次全国空手道大会	第二次全国空手道大会	読者の頁	護身術的組手の研究 (十)
	消息編集部	短歌講習者のうた	護身術的組手の研究	護身術的組手の研究	読者の頁	読者の頁	読者の頁	護身術的組手の研究 (九)
	読者欄読者関係	アメリカカスボーツ界の近 況	小説講義	読者の声	読者の頁	読者の頁	読者の頁	護身術的基礎練習方法
	後記編集部 (Y記者)	プロとアマ	特集空手界の展望 (道場 の巻)	世界スポーツ通信	読者の頁	読者の頁	読者の頁	護身術的基礎練習方法
		世界スポーツ通信	読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	護身術的基礎練習方法
		読者の頁	特集空手界の展望 (師範 の巻)	読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	護身術的基礎練習方法
		読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	護身術的基礎練習方法
		読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	読者の頁	護身術的基礎練習方法
欠落ページ	P.9 ~ P.16	P.3 ~ P.6	P.14.15	P.14.15	P.14.15	P.14.15	P.14.15	P.14.19

また、欠落しているページが4冊に見受けられる^{注6)}。たとえば、「創刊号」では、「拳の握り方と突き方（金城裕）」の項で、『これは主として顔面の攻撃に用います。「拳槌」- 拳を正拳の形に握ったとき、掌の横側面の下部のところをいひます。』⁽¹⁾と、図を用いて具体的な説明が行われているページが欠落している。すなわち、拳の握り方や突き方など、相手にダメージを与えることのできる攻撃的な図が用いられている内容が対象となっている。また「各學校空手部紹介」と題した箇所では、専修大学、中央大学、日本大学歯科を紹介しているページが見当たらず、明治大学からとなっている¹⁴⁾。この大学紹介は、前ページの「拳の握り方と突き方」に続いていることから、単に製本する上で落丁したとも考えられる。さらに、第1巻第6・7・8合併号では、「理想的基本鍛錬法（二）（金城裕）」の項が欠落している¹⁵⁾。当該ページでは、「突き」や「蹴り」の種類が紹介されている。第2巻第1号では、「護身術的組手の研究（六）」の項で、実写真が3ページにわたり10枚、図が2枚（第45図から第56図）用いられているが、この最初の2ページ（第45図から51図）が欠落している。なお、写真そのものは、すでに2冊目となる第1巻第2・3号から使用されていることから、写真そのものの使用が落丁の対象となったとは考えられにくい。そして結果的に最終号となった第2巻第7号の欠落箇所は、前ページからの小説の続きであり、空手とは直接関係のない内容となっている¹⁶⁾。これらが意図的な削除か、単なる印刷・製本時の落丁なのかを断定することまではできない。しかしながらGHQの監視下にあった当時の時代背景から推して、意図的に削除された部分が少なからずあったことは十二分に考えられる。さらに各号の内容は、以下のとおり要約される。

(1)『SPORT KARATE からて。第1巻第1号(創刊号)』

冒頭には、以下のように記述されている。

『唐手はその先賢の「唐手に先手なし」の訓にも明示されてある如く純然たるスポーツにして侵略的何ものをも持たぬ東洋独得のボクシングであるし又中正なる精神の修養と紳士的人格の陶冶に最も良きスポーツであると確信するからである。故に我々は此所に思を致し唐手の発展向上と世界スポーツ水準への到達を図る意味に於て同誌を発刊することとなった。』⁽²⁾。すなわち、同誌では空手道をスポーツとして捉え、世界に普及させようとする意図が窺える。

さらに本文でも、「唐手道の将来（李 禧元）」で取り上げられた「日本と唐手道」の中で、「日本に残された新しい思想的何ものを持たない武道（スポーツ）として唐手道が新しい意味に於いて登場しなければならない。少なくとも此れからの日本に於けるスポーツ面に於いて唐手道は武道といふ面よりも寧ろスポーツ面に於て大いにその眞価を發揮しなければならないし抑揚されなければならない。』⁽³⁾と、唐手道を武道ではなくスポーツとして発展向上させ普及に貢献しようとしている。

また、「創刊号」の「巻末の記」には、『今回は「唐手」と印刷しましたが次号より「空手」と致します』と明記されており、表記にもこだわりを見せている¹⁷⁾。

(2)『SPORT KARATE からて 第1巻第2・3号』

「空手の流派」では、空手という語の発生から解説している¹⁸⁾。すなわち、古くは単に「手」と言われていたが、1905（明治38）年、男子師範学校に正科として設けられた時に「唐手」と書いて「からて」と読まずようになった。しかし、1936（昭和11）年頃に沖縄で「唐手」という字は「からて」の本質と矛盾するところがあるとなり「空手」という字に改められたことが、創刊号の「巻末の記」において「空手」とすることにした理由として特記されている^{注7)}。

(3)『SPORTS KARATE からて 第1巻第4・5号』

「我らの信条」といった部分タイトルが設けられ、空手の発展向上と世界スポーツ水準への到達に向けた呼びかけを行っている¹⁹⁾。また、「から手の修行精神考」では2ページにわたり、空手の修行精神を述べている²⁰⁾。さらに「理想的基本鍛錬法」として空手の鍛錬方法を紹介したり²¹⁾、護身術的組手の研究では、写真つきで技の解説をするなど²²⁾、読者の興味をよせつけようとしている。また、海外のスポーツ界近況として、水上競技・陸上競技・拳闘・庭球を取り上げている²³⁾。

(4)『SPORTS 空手 第1巻第6・7・8号』

巻頭書では空手の在り方について、「これでよいのか」という呼びかけから始まっている。世界水準にまで向上させるには、指導者たちも自覚が必要であることを促している。また、「空手界の展望」と題し、「一 過去の空手界と東都普及」「二 空手発展上の障害の理由」「三 終戦と空手」や「各道場の展望」として松濤館、修道館、和道流本部、韓武館、日本拳法研究会、良武館と、それぞれの道場の特徴が書かれている²⁴⁾。技紹介では写真付きで細かく説明がなされており、その後には注意点も書かれているので読者には伝わりやすい。また世界スポーツ短信では海外のスポーツニュースを取り上げて、スポーツの在り方を紹介している²⁵⁾。

(5)『SPORTS 空手 第1巻第9・10号』

「実際の基礎練習方法」の部分タイトルページが登場した。空手の基礎基本を細かく写真付きで説明している²⁶⁾。「理想的基本鍛錬法」では「空手も、ボクシングのように国際的なスポーツになるべく練習法を科学的に改善していかなければならない」と語っている⁴⁾。『下げ巻き藁』といった空手の鍛錬に適した練習道具の図を掲載し、詳細な説明を施している²⁷⁾。空手の道場が近くにない、指導者が不足している状況をこの本の普及で補おうとしている事を読み取ることができる。

(6)『KARATEDO 空手道 第1巻第11・12号』

「若き空手家へ」と、これからの空手を世界的スポーツとしてあらゆる国に広めるために1日1日厳しい修行を積むように呼び掛けている²⁸⁾。空手を世界に発信していこうという取り組みがわかる。

この号では、この後に紹介する「組手試合」に関する、空手の防具と「韓武館式試合規定」が掲載されている²⁹⁾。従来の号では、一度も防具や試合の話がされたことはなかった。当時、組手競技の際は剣道の防具を使用していたとの記述がある。試合規定を記載したためか、他の号に比べ技の紹介、練習方法を紹介するページが多い。たとえば、「実際の基礎練習方法(二)」では、上段突きの練習方法や下段突きの練習方法など攻撃の際に使用する技を紹介している³⁰⁾。二人組での攻防の説明はこれまでに行われたことはなかった。

同誌では「創刊号」より、必ず「会員募集」と、空手人口を増やそうとする呼び掛けを行うページが設けられている。この号においても「地方支部続々結成される 空手道の将来に朗報」⁵⁾とある。そこでも国際スポーツ空手普及と書かれているため、世界水準に合わせようとする取り組みが行われていた。

(7)『KARATEDO 空手道 第2巻第1号』

巻頭書では韓武館館長である尹曦炳が「空手道の発展に全精力を傾注しよう。世界は招いている我等の平和の技術空手道を」⁶⁾と呼び掛けた。これからの空手の普及・発展を意識しているためか、「特集 若人は起つー各校空手部巡りー明治大学・早稲田大学の巻」と大学生の特集が組まれている。早稲田大学空手道部の部員数は70名に及ぶが、ほかのスポーツとは違い華々しい試合もなく、また道具もほかの部活よりも少ないため学校から支給される部費は体育部のなかでは最も低いと書かれている。明治大学空手道部は今後の部の抱負として、「他の大学と交流試合を行っていききたい。それによって正しい空手の普及向上を計

りたい」⁽⁷⁾と空手の普及を求める抱負を語っている。

この号にいたるまで、より具体的な技や練習方法を紹介してきたためか、試合時に怪我をしたときの手当て法が特集されている³¹⁾。

(8) 『KARATEDO 空手道 第2巻第2号』

前号に引き続き、「特集 若人は起つ－各校空手部巡り(2)－慶応大学・中央大学・専修大学の巻」と大学生の特集が組まれている。このように大学の特集を最初に置き、詳細に綴ることによって、若者の同誌への興味をかりたてようとしている³²⁾。また、「支部続々と誕生 朗報各地から殺到」と題し、韓武館の地方組織が着々と拡大されていることを宣伝している³³⁾。

(9) 『SPORTS KARATE 空手道 第2巻第3・4号』

空手界の復興に活躍した人物を特集するにあたって、修道館館長である遠山寛賢が選出された。遠山寛賢の人柄や、生い立ち、空手の在り方、近く渡米することを紹介している。実際に遠山寛賢に会うことのできない読者との距離を近く感じさせることのできる内容となっている³⁴⁾。

(10) 『SPORTS KARATE 空手道 第2巻第5・6号』

空手家の特集が組まれており、空手道のスポーツとしての発展が阻害されている大きな原因を語っている。空手道の向上のためには、全日本の空手家が固く団結しなければならない。「スポーツとしての空手が、新しい日本の将来に演ずる役割は実に大なるものあり」と述べている。空手のスポーツ化を目指そうとしていることが読み取れる³⁵⁾。

(11) 『SPORTS KARATE 空手道 第2巻第7号』

「特集 若人は起つ－各校空手部巡り－日本大学の巻」ということで前回同様に特集されている。

最初は空手部に対しての大学の意識は低かったが、徐々に認識がたかまり、部費も大幅に増額したことが書かれている³⁶⁾。

空手の練習と試合の心得ということで空手の歴史と流儀を述べている。実際の基礎練習方法では蹴り技に重点をおき説明をしているが、技の応用などより具体的、かつ実践的なものとなっている³⁷⁾。

以上が、各号における内容の特徴である。全体をとおして共通している内容を見ると、「SPORTS KARATE からて 第1巻第4・5号」以降、毎回、海外のスポーツ事情について触れている。1ページではあるが、国を問わず、サッカー、野球、陸上競技、マラソン、テニス、ボクシングなどのスポーツや夏季・冬季オリンピック競技会などの動向を伝えている。

このように、タイトルをはじめ「スポーツ」を随所に示しているが、本質的には空手道の復興・普及を中心とした構成になっている。

III. スポーツとしての空手

1946年に発刊された「創刊号」から、「将来は唐手道なるものを大いに海外に宣伝紹介して東洋的スポーツの良きスポーツ自體としての良さを大いに活用し、マラソンが又フェンシングが古代的な競技の一つとしてオリンピック大会に用いられるが如く其の他のスポーツが世界的舞臺に登場してゐるが如くに発展させなければならない。嘗ての日本の武道であった剣道がアメリカにまで紹介されたやうに唐手道もその真価を大いに發揮してスポーツとしての海外発展をしなければならない。これからの日本が変化国家として再建されなければならない時代文面に於ける運動文化として面もその真価を發揮できるスポーツの一つとして唐手道を必ず世界に紹介しなければならない。」⁽⁸⁾と、すでにオリンピックという言葉を用い、空手をスポーツとして復興・発展させようとする意気込みが読み取れる。

表2 雑誌の本文中に見られる用語の使用頻度

用語	からて					スポーツ				
	唐手	空手	からて	空手界	空手部	スポーツ	スポーツ空手	国際スポーツ	平和的スポーツ	世界的スポーツ
第1巻第1号(創刊号)	30	1				20				
第1巻第2・3号	10	37	2							
第1巻第4・5号		69	4			21				
第1巻第6・7・8号		30		3		24				
第1巻第9・10号		78	2	8		12	3	2	2	
第1巻第11・12号	9	16				9	5		2	1
第2巻第1号	3	17		2	11	8			1	
第2巻第2号		89		6	14	7		2	1	1
第2巻第3・4号		25		4						
第2巻第5・6号		63		1		21	5			
第2巻第7号	1	22			16	4	1			1
合計	53	358	8	18	27	119	14	2	5	2

そこで同誌の本文中に見られる「からて」と「スポーツ」の用語に着目し、その使用頻度を抽出した(表2)。当然のことながら、「空手」や「スポーツ」という言葉が頻回に使用されている。しかしながら「空手」が350回以上使用されているのに対し、「スポーツ空手」は、その10分の1にも達していない。すなわち、空手をスポーツのカテゴリーとして位置づけたいものの、「スポーツ空手」と言い切るには若干のためらいがあったことが窺える。その背景を、別の視点から考察してみよう。

空手道は基本形と形、さらに組手に分類・大別される。実際的に相手を求めて攻防の技を行うことを組手と称し、それらは約束組手と自由組手に二分される³⁸⁾。

空手道における防具の始まりは、東京大学の空手道部史に見ることができる。そこには、『東大では、昭和2年に船越(富名腰)義珍師範の禁をおかして、型地中心から、約束組手、自由組手(乱取)に進み、ついには東大式防具を作るに至った。剣道と野球の捕手の合の子のような面や胴、鉄の棒を曲げて作った金的、蹴る足の指を守る足ばき、剣道の籠手にヒントを得たために、拳のみならず小手をも防ぐ長い籠手。道具は作ったが、進退の自由を妨げられるので、実用には至らなかった。』⁴⁰⁾と記述されている。このように、戦前にも防具を用いた組手競技は存在していた。

いっぽう、同誌では空手が他の諸スポーツと比べて普及発展しがたい理由として、『他のスポーツに於いては歴然と勝敗を決することが出来得る

故、民衆の興味をそそるのでありますが、我が空手に於ては「一撃必殺の鍛錬」を常に続けているから危険性も多分にあり其の完全なる試合の方法がなかつたのであります。』⁴⁰⁾と記されている。

空手道のスポーツ化について、豊嶋はスポーツ武道の本質を比較検討したうえで、「空手道(武道)イコールスポーツではなく、武道としての空手道(武道)(狭義)とスポーツとしての空手道(武道)をも含めた広義の空手道(武道)の中でとらえていくべきであり、これによって、空手道(武道)が多くの人々のニーズに応えることが出来る。』⁴¹⁾と結論づけている。この概念を用いて言うならば、同誌が発刊された時代の空手は、広義の意味でスポーツとして捉えているいっぽうで、実際には、勝敗をつけることができず危険性を伴っていたために、狭義の意味でのスポーツと位置づけるまでには至っていなかったことが窺える。

桧垣は、『スポーツとして空手道を見たときに、本来武術として発展してきた空手道は、発展とともに護身術的な意味が薄れ、競技スポーツとしての傾向が強くなってきた。特に、武道がスポーツといわれるようになったのは、戦後のことであり、武道を戦後の民主主義的価値観の中に溶け込ませるために、「武道」を「スポーツ」と言い換える風潮があったのも事実である。』⁴²⁾と述べている。

総じて、同誌が発刊された頃、空手がどの程度までスポーツ化されていたのかを判断するには慎重さを要する。

IV. 大学と空手道部

大日本武徳会は、船越義珍の松濤館流、宮城長順の剛柔流、摩文仁賢和の糸東流、大塚博則の和道流を空手の4大流派として認めた。4大流派は、寸止めルールで、突きや蹴りをコントロールし、体にコンタクト（接触）する直前でとめることをルールとしている^{注8)}。この4大流派を受けつぎながら、空手は大学を中心として急速に普及した³⁹⁾。慶応義塾大学をはじめ、東京大学、拓殖大学、早稲田大学、日本医科大学、法政大学、東京農業大学、東京商科大学など、大正末期から昭和初期にかけ次々と「空手研究会」が設立された⁴⁰⁾。

同誌では、「各学校空手部紹介」⁴¹⁾、「特集若人は起つ」⁴²⁻⁴⁴⁾と題し、大学空手部についての特集が組まれている。紹介された8大学は、下記のとおりである。

設立年	大学名	流派	師範
大正 12 年	慶応義塾大学	松濤館流	船越義珍
昭和 6 年	早稲田大学	松濤館流	船越義珍
昭和 7 年	東洋大学	修道館	遠山寛賢
昭和 7 年	日本大学	和道流	大塚博則
		松濤館流	山田辰雄
昭和 13 年	明治大学	和道流	大塚博紀
昭和 14 年	中央大学	松濤館流	廣西元信
昭和 17 年	日本大学歯科	日本拳法	山田辰雄
昭和 22 年	専修大学	松濤館流	廣西元信

この特集から、大学では師事する師範により空手の流派が異なっていることがわかる。さらに、日本大学については、「日本大学空手道部は、ほかの大学の空手部のように一つにまとまらずにくつつも別れて独立し、それぞれ異なった歴史を持っているところに特徴がある。同じ学校内にも関わらず違った流派があるということも特殊な現象である。これは各空手道部の歴史をひもとけば自ら諒解できるであろう。すなわち、日大空手部と一口に言っても、経済学部、工科、歯科、三島商科、世田谷商科、郡山専門部農科の七部に分かれそれぞれ異なった運営を行っているが、いずれ

もまじめに、熱心に練習している。まず本稿には、経済学部、工科、歯科の三大空手部を紹介することにした。」⁽¹³⁾と、同じ大学でも学部・科によって部の様相が異なっていることを挙げている。

そこで次に、日本大学の各学部の特色をさらに掘り下げて見ていこう。

経済学部は和道流を取り入れている。終戦後、武道を禁じられた学生たちは、東洋古来のスポーツで心身の鍛錬をはかりたいと念願していたところ、たまたま空手をやったことのある一部の学生の中に、空手こそわれわれの願いを達成してくれる唯一のものであるとして、1945（昭和 20）年 9 月に空手愛好会というものをつくった。空手道部創立当初は、学部 10 名、専門部 20 名、計 30 名であったが、第一回演武会が行われ、その直後に 100 名の入部申し込みがあったとされている⁴⁵⁾。

専門部工科では松濤館流を取り入れて稽古を行った。工科には戦争前から空手道部が存在したが戦争中解散していたために、それまでの詳細は明らかにされていない。空手道部の再建当時、入門者は 30 名ほどだったが、最終的に残った学生は 6 名だった。戦時中から練習を行っていた歯科の空手道部と共に練習を行っており、雑誌が発刊された当時の部員数は新入部員を含めて 45 名で、いずれも空手の初心者であったことが記されている⁴⁶⁾。

歯科は、昭和 18 年に公認され、戦争中も依然として稽古を続けていた。稽古場は、日大歯科付属病院の屋上のコンクリートの床で稽古が行われていた。歯科が大学に昇格したために、空手道部は追い出されてしまい、屋上を道場とするしか稽古する方法がなかった。最初のころは空手の練習を行うよりも、足の苦痛に対する努力が並大抵のものではなかったようである。部員は 50 名で毎日練習をおこなっていた⁴⁷⁾。

以上が、日本大学を一例とした特集の内容である。このように大学内は無論のこと、大学全体として流派を統一しようとする動きもなく、それぞれ独自の活動が行われていた。

このような特集を掲載することは、大学の空手復興に少なからず寄与したと言える。

V. 技について

同誌では、空手道を習得する者には必須となる、「拳の握り方と突き方」⁴⁸⁾、「護身術的組手の研究」⁴⁹⁾、「足の立ち方と蹴り方」⁵⁰⁾、「実際の基礎練習法」⁵¹⁾、そして「理想的基本鍛錬法」⁵²⁾が詳述されている。それらは雑誌が発刊されるごとに内容が難しくなり、読者が道場に通わずとも、空手道の技術を段階的に習得できるよう編集されている。そして、攻撃と防御といった2つの技を系統的に取り入れている(表3)。

「拳の握り方と突き方」では、空手の基礎基本である「拳の握り方」について図を用いて解説している。手を開いた状態から握るまでの一連の動作を描いたものである。「創刊号」において、基礎基本の説明をすることにより、空手道を学びたいものが雑誌を購読することにより、新しい技を習得していくことができた。

第1巻第2・3号では、創刊号で習得することのできる突き技から、自分を守るための受け技や護身術的組手が紹介された。このように攻防を繰り返すことで、空手の組手競技が成立する。また、「足の立ち方と蹴り方」では11種類の立ち方が示されている。

これらの技は、空手を習得するには必要な基礎

表3 技の解説項目

年	Vol. No.	pg.	図	形・技名	分類	備考*	年	Vol. No.	pg.	図	形・技名	分類	備考*							
1946	1	創刊号	10	1	拳の握り方	拳の握り方と突き方	A	1947	1	11.12	5	1	上段突きの練習方法	実際の基礎練習法(二)	A					
			11	イ	平拳						5	5	下段突きの練習方法							
			11	ロ	裏拳						6	6	追突きの練習方法							
			12	ハ	拳植						7	12	正面蹴込の練習方法							
			12	ニ	貫手						11	31	掻き分けの基礎と応用			護身術的組手の研究(五)	B			
			12	ホ	手刀						11	34	八字受け							
12	ヘ	一本拳	12	35	沸落とし															
1946	1	2.3	27	1	外受けの基礎	護身術的組手の研究	B	1948	2	1	11	15	正面中段突き	実際の基礎練習方法(三)	A					
			29	2.3	小指側で受ける方法						16	16	正面蹴り							
			31	4	腕全体で受ける方法						11	17	横蹴り							
			32	6.7	外受けの応用						12	20	足刀部で蹴る方法							
		40		八字立ち	13	22	踏切の練習方法													
		39		ナイハンチ立ち	13	24	上足底で蹴る方法													
		39		猫足立	足の立ち方と蹴り方	A	1948				2	2	7	25.26.27.28	内受け	実際の基礎練習法(四)	A			
		39		前屈立ち									8	31	蹴退り					
		41		後屈立ち									8	32.33	蹴退りの要領					
		42		蹴放									護身術的組手の研究(七)	B	1948	2	3.4	14	57	打ち落とし
		43		蹴込														58	表技の基礎	
		43		蹴上														59.60.61	裏技の基礎	
		44		横蹴り														64	打ち落としの応用	
		45		膝植														15	64	すくい受け
45		踵植						表技の基礎												
1947	1	4.5	16	1				内受の基礎	護身術的組手の研究	B			1948	2	3.4	7	34	その場蹴放し	実際の基礎練習方法(五)	A
			17	2				内受けの応用								8	37	回し蹴り		
1947	1	6.7.8	5					突き	理想的基本鍛錬法(二)	A			1948	2	5・6	8	41.42	飛び蹴り	護身術的組手の研究(八)	B
			6					飛蹴り								12	64	すくい受けの応用		
			6					二段蹴り								13	67	表技の基礎		
			6		横蹴り	68	裏技の基礎													
			7	1	立て猿臂	69	打拂の応用													
			7	2	双立て猿臂	猿臂の種類と当て方	A	1948			2	7				12	77	すくい上げ		
		8	3	横猿臂	12				77	表技の基礎										
		8		双横猿臂	12				78	裏技の基礎										
		8	4	捻り横猿臂	13				79	すくい上げの応用										
		8	6	捻り横後猿臂	15				43	二段蹴り						実際の基礎練習方法(六)	A			
		8	7.8.9	前猿臂	護身術的組手の研究(九)				B	1948						2	7	9	50	四面蹴り
		9	10	後猿臂		13	85	受留												
		9	11	前後猿臂		13	86	表技の基礎												
		12	14	上段受けの基礎		13	13	裏技の基礎												
12	17	上段受けの応用	13	13		受留の応用														
13	19	手刀受けの基礎と応用	14	91		横打														
13	18	蹴の受と拂の基礎	14	91	横打	護身術的組手の研究(十)	B													
1947	1	9.10.	10	3	正面中段突き			実際の基礎練習方法	A	1948	2	7	14	92	表技の応用					
			11		回れ右の方法								15	93	裏技の応用					
			12	24	蹴の受と拂の応用								15	94	横打ちの応用					
			13	27	十字受け															
13	28	蹴りの手刀受基礎と応用	護身術的組手の研究(四)	B																

* Aは攻撃技、Bは防御技を示す。

技術で、「拳の握り方と突き方」、「足の立ち方と蹴り方」を習得すれば「理想的基本鍛錬法」、「実際の基礎練習法」の技は、解説文を読めば理解できるよう考慮されている。

終戦直後の混乱期の中で雑誌を用いて、誰にでも空手ができるよう世間に広め、個人的に能力をつけることを可能にした。このことは、空手の普及に大きく貢献したといえる。

VI. まとめ

本稿では、終戦直後に出版された雑誌『SPORT KARATE からて』の内容を分析することによって、同誌が空手道の復興に与えた影響について考察してきた。したがって、冒頭で述べたように空手の競技化については言及していない。それは換言するならば、同誌からは空手の競技化に関する施策を見いだすことへの限界を示唆している。

空手がオリンピック競技種目として検討され始めたのは、全日本空手道連盟や世界空手連盟といった競技団体としての組織化が図られ、オリンピック競技としての採用基準を満たした近年のことである。しかし空手道をスポーツとして位置づけ、オリンピックの種目に取り入れたいという願望は、終戦直後に発刊された雑誌『SPORT KARATE からて』にすでに明瞭に表われていた。

同誌の発刊は戦後の混乱期において、少しでも早急に大学の空手道部を基盤とした、集団としての空手道の復興を推し進めることを助長した。そして、そのいっぽうで、個人のレベルにおいても、空手道を普及・発展することに繋がっていたと結論づけることができる。

注記

- 1) 富名腰は「富名腰義珍」から「船越義珍」へと改名しているが、本稿では「船越」に統一する。
- 2) 本稿では雑誌全体を示す場合は、創刊号のタ

イトルである『SPORT KARATE からて』を用いる。

- 3) 資料を引用するにあたっては、次のように修正した。常用漢字については、旧字体を新字体にし、その他の漢字は概ね現代の通用字体に改めた。
- 4) 本稿を執筆した時点で、インターネットによる書誌情報検索で製本雑誌が確認できていないのは、『KARATEDO 空手道 第2巻第2号』『SPORTS KARATE 空手道 第2巻第7号』である。マイクロフィルム版は全巻、日本体育大学図書館に保管されている。マイクロフィルム版は、冒頭にGHQの検閲を受けた証が記録されている。

タイトル部の巻・号については、表記を統一した。

第1巻第6・7・8号に関し、表紙には「1947 VOL1 No6.7」とあり、続く目次のページには、「Vol.1 … No. 6.7.8」と記載されていること、さらに、その次に出版されている雑誌が、第9・10号となっていることから、表紙は第1巻第6・7・8号の誤記と判断される。

廃刊の理由について言及された資(史)料は、まだ確認されていない。

- 5) 国際空手道連盟総本部は現存しておらず、その詳細については未だ追究されていない。
- 6) マイクロフィルムには欠落ページがないため、製本雑誌と照合して確認を行った。したがって、製本雑誌が確認されていない『KARATEDO 空手道 第2巻第2号, 1948』『SPORTS KARATE 空手道 第2巻第7号, 1948』については、不明である。
- 7) この呼称については、船越義珍も『空手は沖縄固有の武術である。従来は「唐手」の文字を用いていた為に、支那拳法と混同されることがあり、沖縄の武術「から手」と言はんよりも、すでに日本の武術「から手」となっている今日、「唐手」の字をあてることは不適切と思われるので、「空」の字に改めることにし

た』としている（船越義珍『空手道教範』〔復刻版〕榕樹書林, pp.58-59, 2012.）.

- 8) 4大流派の空手は、伝統派空手と呼ばれている。2020年東京オリンピックは、この伝統派空手方式で競技が行われる。

引用文献

- (1) 『SPORT KARATE からて』第1巻第1号(創刊号), pp.10-15, 1946.
- (2) 前掲(1), p.1.
- (3) 前掲(1), p.5.
- (4) 『SPORTS 空手』第1巻第9・10号, p.15, 1947.
- (5) 『KARATEDO 空手道』第1巻第11・12号, p.14, 1947.
- (6) 『KARATEDO 空手道』第2巻第1号, p.1, 1948.
- (7) 前掲(6), pp.2-5.
- (8) 前掲(1), p.6.
- (9) 東京大学拳法会拳法会報編集委員会『東京大学空手部七十年史』東京大学拳法会, p.7, 1995.
- (10) 前掲(5), p.2.
- (11) 豊嶋 建広, 井上一男「空手道のスポーツ化」*武道学研究* 18(2), pp.71-72, 1985.
- (12) 桧垣源之助『隠されていた空手』チャンプ, p.13, 2005.
- (13) 『SPORTS KARATE 空手道』第2巻第7号, p.2, 1948.

参考文献

- 1) 「<<資料>>空手道のルールと競技人口」全日本空手道連盟 < https://www.jkf.ne.jp/wp-content/themes/jkf-tfif-child/document/other/for_media_document.pdf > (アクセス日 2019年3月1日)
- 2) 『朝日新聞』1999年12月10日夕刊, p.2.

- 3) 『朝日新聞』2016年08月04日夕刊, p.1.
- 4) 宮城篤正『空手の歴史』ひるぎ社, p.16, 1987.
- 5) 桧垣源之助『隠されていた空手』チャンプ, p.22, 2005.
- 6) 嘉手苺徹「空手の名称の変遷:—②「唐手(からて)」から「空手道」への変容—」『*武道学研究*』, 44, S_22-S_22, 2011.
- 7) 前掲(4), p.15.
- 8) 仲宗根源和(編)『空手道大観』(復刻版), 緑林堂書店, p.2, 1991.
- 9) 前掲(4), p.40.
- 10) 船越義珍『空手道教範 復刻版』榕樹書林, p.13, 2012.
- 11) 藤堂良明「学校武道の歴史を辿る」『*月刊武道*』ベースボールマガジン社, pp.88-95, 2017.
- 12) 前掲(4), p.135.
- 13) 「錬武会の心と技」『*月刊空手道*』福正堂, 462(12), pp.25-28, 2008.
- 14) 『SPORT KARATE からて』第1巻第1号(創刊号), pp.15-16. 1946.
- 15) 『SPORTS 空手』第1巻第6・7・8号, pp.5-6, p.9, 1947.
- 16) 『SPORTS KARATE 空手道』第2巻第7号, p.18, 1948.
- 17) 前掲(14), p.20.
- 18) 『SPORT KARATE からて』第1巻第2・3号, p.9, 1947.
- 19) 『SPORTS KARATE からて』第1巻第4・5号, 表紙2, 1947.
- 20) 前掲(19), pp.6-7.
- 21) 前掲(19), pp.6-7.
- 22) 前掲(19), pp.16-19.
- 23) 前掲(19), p.20.
- 24) 前掲(15), p.2, pp.7-10.
- 25) 前掲(15), p.11.
- 26) 『SPORTS 空手』第1巻第9・10号, pp.6-9, 1947.
- 27) 前掲(26), p.17.
- 28) 『KARATEDO 空手道』第1巻第11・12号, p.1,

- 1947.
- 29) 前掲 28), pp.2-3, 1947.
- 30) 前掲 28), p.5, 1947.
- 31) 『KARATEDO 空手道』第2巻第1号, p.9, 1948.
- 32) 『KARATEDO 空手道』第2巻第2号, pp.2-6, 1948.
- 33) 前掲 32), p.13.
- 34) 『SPORTS KARATE 空手道』第2巻第3・4号, pp.2-4, 1948.
- 35) 『SPORTS KARATE 空手道』第2巻第5・6号, pp.2-3, 1948.
- 36) 『SPORTS KARATE 空手道』第2巻第7号, pp.2-4, 1948.
- 37) 前掲 36), p.5.
- 38) 前掲 4), p.48.
- 39) 摩文仁賢和『十八の研究』榕樹書林, p.180,
- 2006.
- 40) 和田 光二「空手道～その歴史と技法～【第6回】本土における空手の定着」『月刊 武道』ベースボールマガジン社, pp.104-111, 2007.
- 41) 前掲 14), pp.15-16.
- 42) 前掲 31), pp.2-5.
- 43) 前掲 32), pp.2-6.
- 44) 前掲 36), pp.2-4.
- 45) 前掲 36), p.2.
- 46) 前掲 36), p.3.
- 47) 前掲 36), p.4.
- 48) 前掲 14), pp.10-12.
- 49) 前掲 18), p.27, p.29, pp.31-32.
- 50) 前掲 18), pp.39-45.
- 51) 前掲 26), pp.10-11.
- 52) 前掲 15), pp.5-6.

(受理日：2019年5月13日)